盾の勇者と武装貿易艦隊シルクロードの船員

ディセプティコン大好き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙世紀〇〇年

自営警察やジャンク屋、宙族、貿易商人などが増えた時代

様々なＭＳ、ＭＡ、兵器などが売られ

あるものは自分を守るために

あるものは自慢のため

あるものは趣味

そしてあるものは貿易団の護衛のため

宇宙戦争で用いられた兵器などは、現在コレクターや様々な機関で使われるように

なった
そして,,,　異世界に転生する者ジム,,,　彼が所属している
貿易団は『シルクロード』
様々なＭＳ、様々な人（５人程）が集まり
面白楽しく過ごしてた
しかし、ある輸送品に,,,　異世界に繋がる魔方陣が書かれた本が入っており
ジムがそれを開けてしまった

目次

第1話 ―――― 1
第2話 ―――― 9
新しい仲間ラフタリア ―――― 27

第1話

「う、うぅん,,,,　こ、ここはどこだ?」
　起き上がる
「本当にここどこ?」
　辺りを見渡すと
　剣、盾、槍、弓を持っている男がいた
「(ぼ、僕は確か,,,,輸送品の中身を見ていて,,,,奇妙な本を開けたら,,,,)」キョロキョロ
　そして
「おぉ!勇者様方!この世界をお救いください!」
　目の前にいる黒ローブの人がいきなり訳のわからないことを言い出した
「「「「は?」」」」
　この場にいる5人同じことを思ったのか同じことを言う
「この世界は今、存亡の危機に立たされているのです!
　勇者様方!どうかお力を貸してください!」

深々と頭を下げるローブの男
「まぁ、話だけなら,,,」
「断る」
「え?!ちょ!君たちさぁ、話ぐらい聞いてあげたらど,,,」
「そうですね」
「元の世界に返してくれるのか?話ははそれからだ」
「強制的に呼びつけた罪悪感はお前らにないのか?」
槍を持った男がローブの男に向ける
「ちょ!君たち!一旦落ち着こ!ね?ね?(汗)」
「仮に平和になったらポイッと元の世界に戻されてはタダ働きですしね」
「こっちの意思をどれだけ組ってくれるんだ?話によっちゃ俺達が世界の敵に回るかもしれないから覚悟しておけよ?」
「,,,(ダメだこりゃ)」
「(こいつら今の状況を受け入れるどころか立場と報酬の話を始めやがった)」
とりあえずこの国の王様に会うことになったぜ
てか、この国すげーな、まるで中世に来たみたいだな
窓の外見たらまじで凄かった(語彙力皆無)

　そうしているうちに謁見についた
「ほう、こやつ等が古の四聖勇者か,,,　一人多い気がするが、戦力が増えたと思えば支障はない」
　謁見の間の玉座に腰掛ける老人が俺達を値踏みして考えながら呟いた
「ワシがこの国の王、オルトクレイ＝メルロマルク３２世だ、勇者達よそれぞれの名を聞こう」
「(おぉ、すげー!マジの王様だ!すげ!)」
「天木練、年齢は１６歳高校生」
「俺は北村元康、２１歳、大学生だ」
「次は僕ですね、川澄樹、１７歳、高校生です」
「俺は、岩谷尚文、２０歳、大学生」
「最後は僕か,,,　自分の名前はジム少尉であります、年齢は２０歳、ナイメーヘン士官学校卒業であります」
　綺麗な敬礼をし挨拶をする
「ふむ,,,　レンにモトヤスにイツキにジムか」
「王様、俺を忘れてる」
「おぉ、すまんの」

「(あれ？なんだこの王様，，，　わざとっぽいな)」
　そして俺たちがいる世界の現状をざっくり説明すると
　まずこの世界には終末の予言なるものが存在するらしい
　予言によれば、いずれ波というものが幾重にも繰り広げられ、その波の齎す災害を退けねば世界が滅ぶという
　その予言の年が今年であり、予言の通り、古より存在する龍刻の砂時計という道具の砂が落ち出した
　この龍刻の砂時計は波を予測し1ヶ月前から警告するという機能を持っている
　次元の亀裂がこの国、メルロマルクに発生し、凶悪な魔物が大量に亀裂から這い出してきたという
　なんとか食い止めたがヤバイので国の上層部は伝承に則り勇者召喚を行ったというのが事
　ちなみに言葉がきちんと通じるのも、伝説の武器の能力によるものらしい，，，あれ？俺持ってないよ？
「話はわかった、で、召喚されてまさか無報酬って訳じゃないよな？」
「もちろん、波を見事退けた暁には十分な報酬を差し上げます」
「へぇー、ま、約束してくれるならいいけどさ」

「敵にならない限り協力してやる、だが飼い慣らせると思うなよ」
「ですね、甘く見ては困ります」
「そ、そうだな（常に上から目線だなこいつら,,,　それに引き換え、ジムって言うやつは）」
「が、頑張ります！」敬礼
「では、勇者達よ各々のステータスを確認するのだ」
「？、ステータスってなに？」
「自分もよくわかりません」
「えぇっと」
「なんだよお前ら、この世界に来て真っ先に気づくことだろう」
「（知るか、なんだその情報通ですって顔は」
「是非教えてください」
「視界の端にアイコンがないか？」
「えぇ？,,,　お、あった」
「それに意識を集中させてみろ」
「わかりました、こうでありますか？」
　目の前にステータスが現れる

『ジム
職業　不明　レベル1
階級　少尉
装備　ＭＳ着装アタッチメント
異世界の服』
「おぉ,,,？ＭＳ着装アタッチメント？（そういえばさっきからポケットに物が入ってるような,,,）」
ポケットを漁るとスマホのような物が出てくる
「これが、ＭＳ着装アタッチメントか,,,」
「Ｌｖ１ですか,,,　これは不安ですね」
「そうだな、これじゃ戦えるかわからねぇなぁ」
「て、いうかなんだこれ？」
「ステータス魔法という勇者のみが使える魔法です」
「へぇー、便利ですね」
「それで、俺達はどうすれば良いんだ？この値は不安すぎるぞ」
「勇者様方にはこれから冒険の旅に出て、自らを磨き、伝説の武器を強化していただきたいのです」

「おぉ！特訓ということでありますか」
「強化？この持ってる武器は最初から強いんじゃないのか？、てか俺のは武器ですらないんだが」
「大丈夫であります尚文どの！防御は最大の攻撃って言葉があるから！大丈夫です！多分，，，」
「最後自信なくしてんじゃん」
「使い物になるまで他の武器を使えばいいんじゃね？」
槍をくるくる回す
「あ、ちょ！危ないでありますよ！」止めようとする
「そこは後々片付ければいいだろう，，，とにかく俺たちは自分磨きするべきだ」
「ひたすらレベル上げですね」
「じゃあ、俺たち４人でパーティーを結成すれば，，，」
「お待ちください勇者様」
「「「「？」」」」
「勇者様方は別々に仲間を募り冒険に出るようになります」
「それはなぜですか？」
「言い伝えでは伝説の武器はそれぞれ反発する性質を持っておりまして、共に行動する

と成長を阻害すると言われています」
「そうなんですか」
「本当みたいだな（会話や情報は伝説の武器が日本語に変換してくれているらしい）」
「あ、けど僕だけ例外らしいであります」
「嘘だろ?!」
「マジかよ」
「今日は日も傾いておる、勇者殿、今日はゆっくりと休み、明日旅立つのが良いであろう、明日までに仲間になりそうな逸材を集めておく、別々に旅立つとはいえ、波の時には肩を並べて戦うのじゃ、各々交流をしておくと良いぞ」
「ありがとうございます」
　その日は皆、王の用意した来賓室で休む事になった

第2話

通された来賓室にて

「いやぁー、俺たちって待遇がいいな」

「そうでありますな、元康さん」

「案内してくれた子もかわいかったし」

「出された料理も不思議な味だけど豪華でしたね」

「確かに！そうでありますな！樹さん！」

「なー、これってゲームみたいだな」

「ゲーム？自分、ゲームはそんなにしたことがないので詳しくはわかりません」

「てか、これゲームだろ？エメラルドオンラインってオンラインゲームだろ？」

「何を言っているんですか？ネットゲームの世界ではなくコンシューマーゲームの世界ですよ、リメンションウェブって言う」

「コンシューマゲーム？」

「違うだろ？ＶＲＭＭＯだろ？、ブレイブスターオンラインとほぼ同じと言っていい」

「ＶＲＭＭＯ???」

「情報を整理しよう、練ＶＲＭＭＯって言うのはそのままの意味でいいんだろうな？」

「あぁ」

「お前ら；；；　一人除いて、意味はわかるだろ？」

「ＳＦゲームにあったような気がしますね」

「ラノベで読んだことはある」

「念のため一般常識の確認だ、千円札に描かれている人は？；；；　せーの」

みんな違う名前を出す

「千円札？ハイトやクールじゃないのか？」

「「「なにそれ?!てか！誰！」」」

「去年の流行語対象は?!」

「好きな声優は?!」

「第二次世界大戦はどの国が勝った？」

「総理大臣の名前は？」

「地球の約半数が死滅したジオンがした奇襲戦法の名前は?!」
「「「いや、お前だけスケールでかいな!」」」
「どうやら僕らは、別の世界から来たようです」
「そのようだ、同じとは到底思えない,,,　一人を除いて」
「へぇー,,,　だからみんなコロニー落としのことしらないのか」
「異世界の日本も存在するわけか」
「てか、ジムさんの世界ってどんな世界なの?」
「教えて上げるけど,,,　話ついてこれる?」

デバイスを机の中央におき
ラプラス事件、ジオン・ズム・ダイクン急死、一年戦争、デラーズ紛争、グリプス戦

役、第一次ネオ・ジオン抗争、第二次ネオ・ジオン抗争、ラプラス戦争（第三次ネオ・ジオン抗争）、の映像を見せると
「「「（　。　д。）ポカーン」」」

終始（　。　д。）ポカーンとしている顔だった

「,,,, ジムさん,,,, 君の世界は僕たちの世界よりすごいんだね」

「時代が違うだけだと思ったが、ここまで一致しないなんてな」

「ていうか、みんなこの世界とそっくりなゲームをやっていたのかよ,,,, 何で俺とジムしか知らないんだろ」

そしてみなここに来た経緯を話す

練は、巷で騒がす殺人事件に友人と巻き込まれ、友人を助けようとして死亡

元康は、二股が原因で死亡（確実に刺されてる）

樹は、ダンプカーに轢かれ死亡

俺と尚文は、本でこちらに召喚された

そして次の日

謁見

ザワザワザワザワザワザワザワザワ

「前日の件で勇者の同行者を希望する者を募った。事前に希望を聞いたところ、どうやらみんな同行したい勇者がおるようじゃ」

「（結構いるな,,,　どんな日とがくるんだろ、楽しみだな）」

「さあ、未来の英雄達よ！仕えたい勇者と共に旅立つのだ！」

結果
天木錬　　５人
北村元康　５人
川澄樹　　５人
岩谷尚文　０人
ジム　０人
「「はぁぁぁぁぁぁ?!」」
「ちょ、ちょっと王様！」
「さすがにワシもこのような事態が起こるとは思いもせんかった」
「志願者０とは人望がありませんな」
大臣は王様に近づき耳元でなにかを囁く

「失礼ですが大臣殿、我々は昨日来たばかりなのでに人望を求めるのは無理な話であります！」

そしてジムは、尚文の前に立ち

「もし、尚文さんがよろしかったら、お供します」敬礼

「ジムさん」

そして

「勇者様」元康の列から一人手を上げる

「！（こ、この子）」

「私、盾の勇者様の元に行ってもいいですか？」

「いいのか？」

「はい」ニコッ

「（ま、まじで？この子が俺の仲間になってくれるの？）」

「良かったでありますな、尚文さん」ニコッ肩を叩く

「他にナオフミ殿とジム殿の下に行っても良い者はおらんのか？」

最終確認をしても名乗りでない

「それではマインは二人の仲間になるがよい。それとナオフミ殿とジム殿はマインの他にこれから自身で気に入った仲間をスカウトして人員を補充するのじゃ」

「あ、はい」

「了解であります」

「そして月々の援助金を配布するが、ナオフミ殿とジム殿のもとに同行者を用意できなかった事は申し訳なく思う。代価として他の勇者よりも今回の援助金を増やすとしよう」

「「あ！ありがとうございます！」」

「では、支度金だ」

「ナオフミとジム殿には銀貨８００枚、他の勇者殿には６００枚用意した。これで装備を整え、旅立つが良い。」

ジム「おぉ、これ全部銀なのか！」

そして外に出る

「よっと」尚文は銀貨が入った袋をうえに投げキャッチする

「じゃぁな！尚文とジム！彼女をしっかりと守ってやれよ」

「了解であります！元康さん！」敬礼

「手伝うことはできませんけど仲間集め頑張ってくださいね」

「時が来たらまた会おう」

「あぁ！また会うときは小隊位になるように！がんばります！」敬礼

「えっと盾の勇者様と，，，　あなたは何の勇者様ですか？」

「僕？，，，　僕はなんの勇者でもない少尉であります！」

「そうですか、私の名前はマイン＝スフィアと申します、これからお世話になります」

「岩谷尚文です、よろしく」

「ジム少尉であります！よろしく」

「よろしく」

そして数分後

「ここは、私おすすめの武器屋です」

「あ、僕には武器や防具は必要ありません、二人だけで買ってください、私は関所の門ところで待っているであります！」敬礼をしスタスタと走る

「わかった、気を付けろよ」

数分後

「おぉ！尚文とマインの装備すごいな！」

「へへへ、そうかな？」

「では勇者様、このあたりに生息する弱い魔物を相手にウォーミングアップしましょうか」

「そうだね、俺は喧嘩はあるけど、魔物は戦ったことないしな。まあ、どれだけ戦えるかやってみるさ」

「健闘を祈る」

「頑張ってくださいね」

「え？マインとジムは戦ってくれないの？」

「私が戦う前に勇者様の実力を測りませんと」

「自分はこのデバイスの使い方を確認するために」

「そ、そうかー」

しばらく3人で歩いていると魔物が飛び出してきた

「あれはオレンジバルーンですね、弱そうな魔物ですが、気を抜かないようにお願いします」

「なるほど」

「まずは俺からだ」

数分後

「はぁ、はぁ」

「よく頑張りましたね勇者様」

「次は俺だな」

デバイスの液晶画面からホログラムが現れる

「な、なんだそれ？」

「まぁ、見てな；；；ガンダム試作1号気ゼフィランサス、装着！」

するとジムの回りに装甲が現れ

ジムに張り付く

「「え？」」

ガシュンガコンガチャンガチャン

そして顔まで装甲が付くと

ピコーーーーン

メインカメラが光る

「装着完了!」敬礼

「ジ、ジム様?」

「お、おい、ジム,,,, なんだよそれ」

「お?これでありますか?これはＲＸ―７８ＧＰ０１ゼフィランサスであります!元々の大きさは頭頂高１８．０ｍだったのでありますが、私の身長に揃えた感じになっているであります!」

「「へぇー」」

「では、説明はこれくらいにして,,,　ジム少尉!突貫しま!」
　バックパックからビームサーベルを抜きシールドを展開し前に構えブースターを吹かし

　すごい早さめオレンジバルーンのところに突っ込み切り刻む
「,,,　すげー」

「そこかぁぁぁぁ!」頭部バルカンを放ち辺りのオレンジバルーンを殲滅する

「ジム様!それは明らかにやりすぎです!」
「あ、ごめんね」
　そして尚文は伝説の武器に素材を吸収させる
「ジムさんのには吸収させないのですか?」
「僕の場合は、レベルアップすれば使える機体が増えるんだ」

「へぇー、便利だな」
　そして武器屋で武器を買い宿屋に行き食事を済ませ明日行く場所を決める
「勇者様,,,　ワインは飲まれますか?」
「パス!二日酔いしたくないから!」
「俺はあまり酒好きじゃない」
「そうですか,,,」グビッと1飲み
「私、勇者様と一緒に飲みたいな」
「申し訳ないが、やめておくよ,,,　せっかくのお酒のお誘い断ってごめんね」
「明日も早いからもう寝る」
「それじゃあ、私はもう少し飲んでますね」
　こうしてマインと別れたジム達は部屋に入りすぐにベッドに入り
「おやすみー、イビキうるさかったら無理やりでもいいから起こしてね」
「おう、おやすみ」
　すぐに寝た
　しかし次の日,,,　まさかあんなことが起こるとは二人は予想していない

新しい仲間ラフタリア

次の日
「おい！ジム起きろ！おい！」
「んん、なんですか？朝っぱらから？」
「やられた！俺の金と装備がない！」
「え！けど、俺の金はあるけど，，，　まさか！あの子が！」
　すると部屋の扉を蹴破るようにして兵士達が入ってき
「盾の勇者とその仲間だな」
「え？あ、はい」
「国王様から貴様等に召集命令が下った、ご同行願おうか」
「召集命令？いや、それよりも俺、枕荒らしに遭っちまったんだ。犯人を――」
「さあ、さっさと着いて来い！」
「え？ちょ！待って！自分であるくから！」
　そしてジム達は兵士達に連れられて歩く
　城に付き謁見の間に通される

そこには不機嫌な面持ちの王と大臣、そしてマインや元康、練、樹がいた
「皆さん,,, どうしたんでありますか!まさか!緊急事態でありますか?!」
「本当に身に覚えが無いのか?」
元康が仁王立ちになり、ジムと尚文を問いただす
「知りません」
「俺も」
「本気で言ってんのか!?まさか、お前らがそんな外道だとは思わなかったぞ!」
「げ、外道?!」
「して、盾の勇者とジムの罪状は?」
「罪状?何かやったのか?」
「黙れ!マインが言ってたぞ!昨日酒に酔ったお前らがマインの部屋に乱入して服を引きちぎると無理やり関係を持とうとしたって!そのあと、あの子はお前らを振り払って俺に助けを求めにきたんだよ!」
「え?!な、なにを言っているのかいまいちわかりません,,, 昨日は夜食を終え、すぐに部屋に行き就寝しました」
元康の服装を見ると
「な!その服を!お前が枕荒しだったのか!」

「な！,,,　あれは！尚文さんの装備！」
「枕荒し？ふんっ、これは昨日マインがプレゼントだって言ってくれたんだよ」
「そんなの嘘だ！」
「黙れ外道共め！」
「嫌がる我が国民に性行為を強要するとは許されざる蛮行、勇者でなければ即刻処刑物だ！」
「処刑?!だから誤解だって言ってるじゃないですか！俺はやってない！」
「,,,　そうであますか」
　そしてなんやかんやあり
　波のこともあり、なんとか外に出れた
「,,,」
「尚文さん、今日は厄日ですね（汗）」
「,,,」
「おい！盾のあんちゃんと仲間！仲間を襲ったんだって！一発ずつ殴らせろ！」
「武器屋の店員さん,,,」
「あんたも俺のこと疑うのか？」鋭い目付き
「！,,,　お前,,,」

「,,,　そうか、命拾いしたな」
「おい、待て,,,　これをやるよ」
　煤けたマントを尚文に投げ渡す
「そんな格好じゃなめられるぜ」
「いくらだ？」
「まぁ、在庫処分なので銅貨５枚だな」
「そうか,,,」
　マントを羽織
「いつか返す」スタスタ
「ありがとうございます！武器屋の店員さん！」敬礼をし
　尚文についていく
「（死ぬなよ,,,　あんちゃん達）」
　そして数時間モンスターを倒し続け
「ふぅ、疲れた」
　ジムレベルアップ
　機体入手　ゼフィランサスフルバーニアン
　　サイサリス（ビームバズーカ仕様）

バイアランカスタム

そして町に戻り

素材を売るとき少しだけいざこざが起きたがなんとか売れた

酒場

「生きたオレンジバルーンを見せて脅すなんて,,,　スゴいね」

「,,,　まぁな」

「盾の勇者様～仲間にしてくださいよぉ～」

「じゃあ先に契約内容の確認だ」

「はーい」

「まず雇用形態は完全出来高制、意味は分かるな?」

「わかりませーん!」

「チッ!そんなのも分からねえのか、バカは足手まといだ、失せろ」

「なんだと!?」

「ちょ、落ち着いて,,,　なら僕と戦って勝てたら仲間にするよ,,,　ついてきて」

外に出る

一人残された尚文はおもむろにジムの食べ残しを一口食べてみる

「うま!俺こっちにしておけば良かったな」

1分後、ジムは帰ってきた
サイサリスの姿で,,,　だが
「あれ?,,,　入れない」
肩の幅が大きく引っ掛かり入れない
「当たり前だろ,,,　早く装着解けよ」
「はーい」装着を解く
「ちょっと、外に出るな」
「じゃ、俺はそこら辺ぶらぶらしとくね」
別行動をすること数分後
「,,,　あの、尚文,,,　この子は誰?」
獣耳の女の子,,,　ラフタリアだ
「こいつは俺の奴隷のラフタリア,,,　ラフタリア、挨拶」
「よ、よろしくお願いします,,,　ゴホゴホ」
「はぁ,,,　マジかよ,,,　まぁ、よろしくな」
次の日
武器屋に行きラフタリア用の武器を買い
酒場に行くが

店の入り口の前で立ち止まるラフタリア
「あ、あの」
「どうした？」
「席取っておくね」
「え、えーと」
「早くしろ」
「は、はい」
そして飯を注文し食べる
「♪」
ラフタリアは美味しそうに食べている
「和むな♪」
食べ終わる
「あ、そういえば尚文，，，　自分はしばらく別行動をとるであります！」
「なぜだ？」
「，，，　理由はありません」
「，，，　そうか，，，　まぁいい，，，　死ぬなよ」
「了解であります！尚文さん！ラフタリアさん！次会うときはもっと美味しいものを一

緒に食べましょ」ニコッ

「は、はい！」

こうして、尚文とジムは別行動をするのであった